捨てた命は「モノ」じゃない

いすみ市立国吉中学校　三年　伊大知真百花

「ここに子猫を捨てた人、あの猫は親切な人に拾われたのではありません、カラスのおもちゃにされて無惨に息絶えました。このひとでなしめ。」

私が SNS を見ていた時に「実際にあった張り紙」というタイトルで投稿されていたものです。これを読んであなたはどう思いますか？楽しさと面白さを求めてスマホを見ていた私にとって、突然流れてきたこの投稿はあまりに強烈で、私の胸は強く締め付けられました。子猫が生まれたのは飼っていた人の責任、なのに身勝手にも道端に捨てられ、その子猫は苦しみながら死にました。

命を無碍に扱うのはやめてください。

猫や犬を捨てる人の理由として考えられるのは、経済的に余裕がなくなったこと、妊娠してしまい数が増えて飼えなくなったこと、引っ越し先がペットの飼えない場所だったこと、などでしょう。しかし、どれも人間の都合としか思えません。

例えば、「妊娠して数が増えたから」という理由についてですが、避妊治療をしていればそうはならなかったはずです。自治体によっては、避妊治療に対して支援金を出しているところもあります。猫１匹育てるのに、だいたい二百万円かかるというデータがありますが、避妊治療の費用は一万五千～三万円程度。二百万と比べれば明らかに安いのです。引っ越した先がペットの飼えない場所だったという理由も、事前に調べていればわかったはずでしょう。どうしてもそこに住みたいのなら、引き取り手を見つけるまで探し続けるというのが飼い主の責任です。

こうした無責任な行為は以前と比べて減ってきてはいるものの、ゼロではないのが現状です。この行為を減らすために、私は「ペットの目線になってその運

命の悲惨さを伝え、命について考えさせること」を提案します。

先に述べたSNSの投稿を例にして、猫の目線になって考えてみます。

親猫は、四匹の子猫を生みました。しかし少し経った頃、飼い主は我が子を段ボールに入れてどこかに連れて行ってしまいました。今まで、自分に対してこの飼い主は良くしてくれていたのだから、我が子に対してひどいことはしないだろうと思っていましたが、帰ってきた飼い主の腕には、段ボールも自分の子もいませんでした。途方に暮れる親猫。母乳も与えることができないまま、親猫はただひたすら我が子が戻るのを切望し、鳴き続けるのです。

一方、捨てられた子猫は、いきなり親と離れ離れになり初めて外の世界に連れられ、逃げるすべもなくカラスに襲われました。兄弟が死んでいく姿、引きずり回され、死にきれないまま、小さい体で苦痛に耐え続ける子猫。冷たい雨に打たれ、子猫はただただ命のともしびが消えるのを待つしかないのです。この状況を作り出したのは紛れもなく捨てた人間です。もしこれが人間世界で起こったとしたら、どれだけの惨劇だったでしょうか。大げさではありません。なぜなら命の重さは平等だからです。どれだけ罪の意識に囚われようとも、決して許されることではありません。

皆さん目を向けてください。ペットを捨てる行為がどれほど非情なものか。

私も捨て猫を拾い、飼ったことがあります。その捨て猫を見つけたときは、幸いにも段ボールから脱走できるほどには元気でした。今思うとあれほど元気なうちに見つけることができてよかったと思います。

今、家族としてペットと一緒に過ごしている人へ、たくさんの思い出を作って最後まで幸せに過してください。今から、親しい家族として迎え入れようとしている人へ、本当に最後まで面倒を見ることができるかどうか、もう一度考えてください。命を身勝手に捨てる行為は決して許されることではないのです。